
ナキムシ少女

速水代瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナキムシ少女

【Nコード】

N1995U

【作者名】

速水代瑠

【あらすじ】

目が覚めると、そこは永遠に続くオレンジ色の世界だった。そこで僕は、一人の少女と長い河を下ることにした。

僕には子供の頃から、親友と呼べる人物はいなかった。周りとはうまくやっていたし、いじめられるようなこともなかった。でも自分の本音を話した事は一度もない。ただ相手の顔色をうかがい、いつもその場に合わせて自分の意見を殺して生きてきた。そのせいか、学校の遠足などでグループの人数が合わなくなる様な事があると、僕はよく省かれた人達が集まったグループに分けられた。別にその人達とも上手くやれないわけではなかったが、あまり気分のいい事ではなかった。

小さい頃にはあまり気づかなかったが、孤独感というのは大人になるとだんだん感じていくものだ。どこの集団にも所属しないっていうのは結構不安になるもので、時々無性に一人が寂しくなった。でもいままさら誰かを求める気にもなれないし、このまま一人でも僕はやっていける。

ある時、僕はふと感じた。それは胸の中にぽっかりと穴が開いてしまったような感覚で、その感覚は時間と共に僕の中でどんどん大きくなっていった。そしてその感覚が大きくなるにつれて、僕はよく考え事をするようになった。それは生きるとか、死ぬとか、愛とか、差別とか、とにかくいろいろな事を考えた。考えられなくなる、僕はよく眠りに就いた。眠って時間がたつと、頭の中がすっきりしたように感じたんだ。次第に僕は本当にどうでもいいことまで考えるようになった。宇宙の始まりとか、僕たちの存在意義とか、神様の事とか、とにかく考えてもどうしようもない事ばかり考えていた。僕は本当にたくさん考え事をした。あまり自信のない僕だけど、このことに関しては自信が持てる。

でも一つだけ問題があった。そんな事ばかり考えていたら、僕はだんだん生きている理由がつかめなくなってしまうんだ。なんだか僕は、生きている事がとてもむなしい事であるように感じた。愛

とか、絆とか、友情とか、そんな響きの言葉に嫌気がさしてならなかった。しかしそれでも僕は、そんな答えの出ない答えを求め続けた。毎日毎日、目から鱗が落ちる瞬間を待ち望んだ。だから僕は、ちよつとだけ永い眠りにつくことに決めたんだ。

目が覚めると、そこは小さな小舟の上だった。僕は仰向けになつて寝ていて、目の前にはオレンジ色に染まつた綺麗な夕空が広がり、心地よい風が僕の頬に触れていた。僕は起き上がるうとはせず、しばらくの間その夕空を見続けた。

「もう起きてるの？」

突然声がしたので、僕は飛び跳ねるように起き上がり声のする方を見る。すると小舟の先端に、女の子が一人、じつとこちらの様子をうかがっていた。女の子は所々に白いラインが入った黒いワンピースに身を包み、その細く華奢な肩にまた同じような柄の黒い肩掛けをかぶせている。着ているものは白と黒で統一されていたが、彼女の髪の毛は綺麗なオレンジ色に染まっていて、この夕空の下でもひどく輝いて見えた。

「お兄さんは誰？」

年齢と容姿に見合わない、少し低めの声で女の子は尋ねてきた。

「僕はリヒト。大学で外国語の勉強をしている学生なんだ」

そんな僕の自己紹介に、女の子は首をかしげた。

「なんでそんな話をするの？ 私はそんなことを聞いたんじゃないの」

そう言つと、女の子はまたじつと黙つて僕のことを見続けた。彼女の瞳を見ると、まるでどこか別の遠い場所見ているような印象を受けた。何かをひたすら見つめているような、そんな感じの

瞳だった。

僕はそんな彼女に、何を話せばいいのか分からなくなり、必然的に黙りこんでしまった。僕がそうやって黙り込んでいても、女の子はずっと僕のことを見続けていた。彼女にとって、沈黙とはそれほど居心地の悪いモノではない様子だった。でも僕にはちよつと耐えられない。

とりあえず何か自分の事を話さなくてはと思ったので、僕は自分の考えている事を話すことにした。

「僕は、普段『愛』について考えているんだ。もちろん君のことを言っているんじゃないよ。よく恋人や家族の間なんかで使われる言葉のことを言っているんだ。僕は正直、愛つてものを体験した記憶が無いんだよ。もしかしたら僕がうんと小さい頃にあるかもしれないけど、僕の記憶にはそんな経験はない。つまりところ僕には、愛つてものがどんなものなのか、具体的に把握できていないんだ。少なくとも、僕の周りの奴らが使っている愛つて言葉には、はなはだ疑問を感じざるをえない。彼らはなにも考えないで、ただ自分の欲望を『愛』つて名前で呼んだりするんだ。つまり酔っぱらっているんだよ。お酒も飲んでいないのに、自分が作り上げた自分自身の姿に酔いしれてるんだ」

そこまで言つて、僕はハツとした。こんな年端もいかない女の子に、僕は一体なにを話しているんだろう。

僕は普段、自分の考え事なんて人には話さない。そういう考えは、思考の停止したグループにおいて異形の存在になつてしまうからだ。でも今、なぜだか口から自然にそんな言葉の数々が飛び出した。僕は自分に少し驚いた。今まで誰にも、こんな事話したりしなかったのに、なぜかこんな初対面の女の子に話してしまったのだ。

「ごめん、こんな話をしてもよく分からないよね。君の名前はなんて言うのかな」

僕は話を切り替えるようにして、女の子に名前を尋ねた。

「私はアイ」

それだけの言葉をゆっくり短く言うと、女の子は船の先端に座り、足を外に出してブラブラ遊ばせながら、先に続く景色を見続けた。

僕もアイという少女にならって、周りを見渡す。するとそこには一面にオレンジ色の世界が広がっていた。夕陽はとても大きく、まるで絵本が何かで出てくるような夕陽だった。小舟はとても大きな河の中にあって、その周りには先が見えないほどに広がる、美しい緑の草原が続いてた。程よい風が草原の草を揺らし、僕の頬に当たって自然のいい香りを運んでくれている。僕はこの世界の居心地のよさに感動した。そしてこの世界は、僕が今まで見てきた中でまさしく一番美しいものであると確信できた。

「アイ、ここはどこなんだ？」

女の子は顔だけこちらに向けると、不思議そうな顔をして答える。
「船の上」

「そうじゃなくて、この世界はどこなんだ？」

その質問で、女の子は首をかしげたまま黙り込んでしまった。どうやら彼女にも、ここがどういうところであるのか分からないらしい。

「じゃあ、この船は一体どこに向かっているんだい？」

「海に向かっているの」

「海に？どうして？」

女の子はそこでまた黙り込む。なにか考え事をしているように見えたけど、彼女が一体何を考えているのか、僕には全然想像もつかなかった。

しばらくすると、女の子はなんの予告もなしに話を始めた。

「……世界がどうなっているのか、リヒトは知っている？私は知らない。私の眼に映る景色は、この美しい世界しかないの。私にはこの永遠にも続く世界が、どうしようもなく退屈でならない」

そこで女の子は少し間をおいてから、言葉選ぶようにして次の話を始めた。

「私ね。ずっと上のほうにいたの。ずっと上のほうよ、もう長い

事この河を下っているもの。それでね、わたし海って見たことがないの。今までに、たった一度も海を見た事はなかったの。最初はほんのちよつと行けば海に着くと思っていたんだけど、でもいつまでたっても海には着かない」

「つまり、君は海を見てみたいって事なのかな」

女の子は、しばらく間をおいてから頷いた。すると用件は終わりねつと言わんばかりに、くるりと体の向きを変えて、また先に続く景色を見続けた。

ずいぶんとマイペースな子だと思ったが、僕はとりあえずこの女の子と一緒に河を下ることにした。

どんなに時間がたつても、夕陽が沈むようなことはなかった。この世界には昼夜という概念は存在しない。ただ僕たちは、永遠にも続くオレンジ色の中を漂い続けていた。

アイと一緒に河を下っている間、僕はいろいろな疑問を彼女に尋ねてみた。だけどそのたびにアイは首をかしげて黙り込んだ。次第に僕も、この世界に対するいろいろな疑問を考えなくなっていった。訳が分からなくなって考えられなくなったというよりは、このオレンジ色の世界そのものが、僕の中に溶けて混ざりあっていくような感じがした。まるでそれが僕に語りかけてくるみたいに、僕はゆっくりとこの世界になじんでいった。

随分と長い時間、僕たちは同じ船の上で過ごしていたが、あまり会話することはなかった。僕はただ変わり映えのしないオレンジ色の景色を見続けて、アイは静かに歌をうたっている。

「無題」

この世界の汚さに疲れた。

人が作り出すものは、もはや汚物のように、世界にこびりつく。

この世界に生きる事が疲れた。

果てしないほどの無気力が、煙になって空気になって、世界を塗りつぶす。

私がほしいのは、尽きる事のない、安らぎだけ。

ただ衰退が、死が、無が、私を包みきるのを待つだけ。

私の望みはただそれだけ。

アイの声は、見た目のわりに低い声だ。でも決してハスキーとか
そういんじゃないくて、むしろ女の子らしい可愛い声だった。ただそ
の細くしなやかな姿にしては、低い声だなんて僕が感じるだけ。ア
イは無口だし、あまり表情の豊かなほうではなかったが、彼女の歌
声はとても美しく、綺麗で、色彩豊かな、上手い表現は見つからない
けど、おおよそ誰もが褒めて聞き入るような歌声だった。

僕はそんな彼女の歌声を聴いて、物思いにふけていた。彼女の
歌声は、僕をとて安心させる。赤子が母の歌を聴き、静かに寝入
るように、僕はその優しさの中に平和を見出す。

ふと、アイが歌うのを途中でやめる。彼女は立ち上がって、無言
で前方の方向に目を細めた。僕も気になって、彼女と同じ場所を目
で追っていく。最初に見えたのは、河の岸部から数メートルほど伸
びている、木製の栈橋だった。次によく見てみると、その栈橋の上
で釣り糸を垂らしている老人の姿が見えた。僕はこの世界で、アイ
以外の人間に初めて会ったので、この時とても驚いた。

僕たちは二人して何も語ることはなく、ただ小舟を老人のいる栈
橋まで進ませた。

「ほおほお、久しぶりの客人かな」

老人はアゴに生えた立派な白ヒゲを触りながら、ゆっくりとした
口調で話しかけてきた。彼は緑色のゆったりとした感じの服を着て
いて、麦わら帽子を頭にかぶっていた。髪の毛は半分以上が白くな
っていて、ところどころにまだ黒いラインが残っている。老いばれ
てしわの多くなった手には、竹で作られた釣り竿が握られており、
彼のそばには釣りに使われる道具が一式広げられていた。

僕は老人に向かって、アイに何度もした質問を尋ねる。

「おじいさん、ここで何をなさっているのですか？」

「見ての通り、釣りをしています」

「ここがどういところなのかお分かりになりますか？」

「…さあ、私にはさっぱり。ただ時間の流れが永遠にも続く世界だとか」

どうやらこの老人にも、この不思議な世界については何もわからないらしい。

「ところでどうですか、お若い方。ほんの少しばかり、釣りでもやっていきませんか。釣りは心を空っぽにしてくれますよ」

老人はそう言って、二人分の釣り竿を僕たちに渡してくる。僕はアイにどうするか聞こうとしたら、その前に彼女は小舟から棧橋に移って、老人から釣り竿を受け取っていた。

「お嬢さん、釣りのコツは忍耐ですよ」

老人はアイに餌などの釣り道具を渡しながら、そう言った。

「忍耐？」

アイは小首をかしげる。

「そうです。たとえ一匹も釣れなかったとしても、投げ出さずじっと耐える事です」

「一匹も釣れない事があるの？」

「あります。釣りとはそういうものです」

アイはしばらく沈黙をおいた後に「わかった」とひとことだけ言って、道具を一式もち棧橋に座って釣りを始める。まさか彼女を置いて河を下るわけにもいかないのです、僕も老人から道具を一式借りて、一緒に釣りをすることにした。

老人に一言お礼を言ってから道具を貸してもらい、僕は棧橋に座っているアイの隣に腰掛ける。彼女は不慣れな手つきで、釣り針に練り餌をつけようとしている最中だった。僕も同様に、釣り針に練り餌をつける。隣を見ると、彼女はまだ練り餌と格闘中だった。僕はそんな彼女の手から、釣り針と餌を奪って、代わりにつけてやる。

「君は、釣りってやったことないのか？」

アイは少し間を置いた後に、首を思いつきり左右に振った。まるで顔についた虫でも払うみたいに振るので、僕はちよつと身を引い

てしまう。

「リヒトは釣り、やったことあるの？」

彼女は僕の顔を見ないで、ただ前方に映るオレンジ色の景色を見ながら言った。

「あるよ、家族で昔、大きな河に行つて釣りをしたんだ。まだ僕がうんと小さい頃だったけど、練り餌をつけるぐらい今だって簡単にできる」

「ふうん」

アイはそっけない返事だけをすると、釣り竿を思いっきり振つて、仕掛けを河に投げ入れた。

長い時間釣りをしていたが、僕たちが魚を釣り上げるような事は一度もなかった。僕たちが来る前からずっと釣りをしていた老人でさえも、魚を釣り上げるようなことはなかった。よく見ると、老人の周りには釣りの道具でにぎわっているが、魚を入れるような水をためたバケツはどこにも存在しなかった。

アイの方を見ると、釣りに飽きてしまったのか、桟橋に座つてオレンジ色の景色とにらめっこをしている。僕はこの河には、魚など一匹もいないのではないのかと疑い、水面を覗きこんだ。しかし河は夕陽の光を反射して、僕にオレンジ色の水面しか見せてはくれなかった。

僕はなんで老人が、こんなにも魚のつれない場所で釣りをしているのか不思議に思った。老人の横顔を見てみると、そこには酷い疲れの色が浮かんでいた。彼の顔を覆うそのシワが、彼の生きた証しとして、その魂を燃やした証しとして、燃えっカスのように広がっていた。肌の色は黒くなり、黒墨を乱雑に時間をかけてその肌にしみこませていった様な感じに、彼の表面にあらわれている。

「ねえおじいさん。ここの河には、なんの魚が釣れるの？」

唐突に、今までオレンジ色の景色を見続けていたアイが老人に尋ねる。老人は少し考え込んで、自分の顎に生えている立派な白ヒゲに触りながら答えた。

「さあ、私にも分かりませんな」

「おじいさんにも分からないの？」

「お嬢さん、私はここに長い事いますが、今までに魚を釣り上げた事は、たったの一度としてないですよ」

そう言われると、アイはきょとんとした表情になる。そして彼の言っている意味を理解しようと、頭を回転させる。少しの沈黙が続いた後「どうしてこんな場所で、釣りをしているの？」と、彼女は尋ねた。

「私は別に、魚を釣り上げるために釣りをしているわけではないですよ。ただ疲れたから釣りをしているのです」

「じゃあ、何に疲れちゃったの？」

その質問をされると、老人はしばらくの間、流れる河を見ながら黙りこむ。これから言うべき言葉を考えているようにも見え、なにかひどく昔のことを思い出しているようにも見えた。彼は河を見続けている間、まったくの無表情だった。まるで何年も動かないで、そこで河を見続けているみたいに、彼はまったく微動だにしない。僕たちはそんな彼に、なにかしら声をかけることができないでいた。ただそんな銅像と化してしまった老人の背中を、僕たちはずっと見続けていた。

突然、老人は河を見つめていた顔を上げる。そして一言だけ口にした。

「生きる事ですか」

「生きること？」

アイが間髪入れずに聞き返す。

「そうです。生きていくことに、私は疲れてしまいました」

その言葉を言い終えると、老人は深いため息と共に、沈黙の中へ

と沈んでいった。

若い頃、私は神童と呼ばれ、そしてみんな期待に合わせて成長していった。私は科学というものにとっても興味を惹かれていくのと同じに、深い高慢な感情を抱くようになった。もはや私の周りには競い合えるような人物はいなかった。いや最初からそんな者はどこにも存在していない。次第に私の名前は世界に知れ渡り、私を取り巻く集団だけではなく、その外側の連中までも私に興味や憧、尊敬の念を抱くようになっていった。

私は彼らのためにある種の正義感みたいなものを振りかざし、そして世界的な大発明をした。それは多くの人に夢と希望を与えるものであり、多くの人々の未来を奪うものでもあった。幸いなことに私の名前は良い方向へと世間に流れ込んだ。私は多くの人々に尊敬され、また私を知らない者などどこにもいなくなった。

しかしそんな私を襲ったのは、とてつもない疲れだった。私は今まで、なぜこんな事をしてきたのか分からなくなった。人のためになることをしたが、それが自分にとってなんの意味を持ったのか。それが本当に私の望むことだったのか。急にそんな疑問が私の頭を駆け巡った。

私の疲れはいつになっても治らなかった。それは深い漆黒の海にどれだけ体を沈めようと、治ることはない疲れだった。その疲れは次第に、私の心や体を衰弱させていく。

疲れた。私はもう何も考えたくなどない。ただこの疲れを癒し、完全なる静寂と安心を、私は求めだけになった。

「おじいさん！引いていますよ！」

釣り竿を持ちながら居眠りをしている老人に、僕はあわてて呼びかける。老人の持つている釣り竿は、大きく水面に向かって曲がり、魚が食いついているのが一目でわかる。

「ほお！本当に引いていますな！」

老人は眠りから目覚めると、持つていた釣り竿をめいっぱい振り上げた。

バチャン！

ところが釣り糸の先には魚の姿はなくて、代わりに河のほうに魚が吹っ飛んでいるのが見えた。どうやら勢いあまって、釣り針からは外れて飛んでしまったようだった。僕と老人は、二人してその魚が飛んで行った方向を、啞然として見つめていた。すると突然、後ろのほうで鈴の鳴る様な笑い声が聞こえてくる。僕は驚いて後ろを振り返ると、そこには当然のようにアイがいて、そして笑っていた。彼女の無表情で一種の芸術にまで思えた顔が、歪んでシワを作って、クスクスと笑顔を見せていた。すると今度は老人が笑い始める。彼の笑い声は、年齢に見合わず大きな音量を持つて空気を震わす。そうなってくると、僕も必然的に笑いが込み上げてきた。腹の底から抑えきれなくすぐりが僕の喉まで登ってきて、僕は笑い声をあげる。僕たちは三人で笑いあった。オレンジ色の空の下で、木製でできた栈橋の上で、静かに流れる河を足元にして、僕たちは三人で笑いあう。

「ほっほっほっ！長い事ここで釣りをしていましたが、魚がかかったのは初めてですよ！いやあ、ゆかいだ！なんだか今日はとってもゆかいな日だ！」

魚は逃してしまっただが、それでも老人は満足な様子だった。

僕たちはその後もしばらく釣りをしていたが、結局魚が掛かったのは老人が逃した一匹だけだった。そして僕とアイは釣りをやめて、そろそろ河を下ることにした。

「いやいや今日は随分と楽しませてもらいましたよ。こんなにも気分が良いのは、随分と久ことだ！」

そう言って老人は、河を下り始める僕たちの見送りをしてくれた。僕たちは老人に釣り道具の一式を返して、二人で小さい小舟に乗り込む。老人は僕たちが来た時と同じような姿勢になり、また釣り糸をオレンジ色の河に垂らし始めた。

「気をつけてゆきなさい。また縁がありましたら、一緒に釣りでみましょう」

老人は右手に釣り竿を握り、空いた左手で手を振ってくる。

「お世話になりました」

僕たちは二人してお辞儀をすると、河を下るべく小舟を進ませた。アイと老人はしばらくのあいだ手を振りあっていたが、ある程度小舟が遠ざかると、彼女は初めて会った時と同じようにして、小舟の先端に座った。

僕は最後に老人の姿を見ようと、栈橋の方に振り返る。ところが栈橋の上には老人の姿が見えなかった。ずいぶん遠く離れていたけれど、老人の姿は十分に確認できるはずの距離だった。ただ栈橋のどこを探しても、老人の姿は見えない。僕は不思議に思ったが、たいして気に留めることなく、そのまま小舟を進ませることにした。

2・（後書き）

時々、ひどく疲れてなにもやる気がしなくなる。もともと無気力な人間ではあるけれど、その時は本当に眠る事ぐらいしかできなくなり、そして恐ろしい不安にかられる。そんな時、私を慰めてくれるのはくだらないラブコメ漫画の数々。そんなもので、私は自分の不安を慰めている。いつか不安のない、安らぎの人生を送れるようになりたい。そして安眠を私にください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1995u/>

ナキムシ少女

2011年10月8日23時24分発行